

情報化社会と教育Ⅱ — 電話というメディアとメッセージ —

鬢 櫛 久美子

はじめに

高度情報化社会⁽¹⁾といわれる今日、人々はさまざまなメディアを介してコミュニケーション行動をしている。ことに近年急激に普及したものに、ケータイ⁽²⁾がある。担当講義において、ここ数年アンケートを取った結果、100%の学生が利用していることが明らかになった。昨年、ケータイを、携帯電話、つまり身につけて持ち運ぶことのできる電話という視点から、「ケータイ」ということばを鍵に考察した。情報化社会における最先端のメディア、ケータイに焦点を当て、情報化社会が人と人とのくかかわり合いにどのような影響をもたらすかを検討したのである。その結果、ケータイコミュニケーション空間は、どこにでもプライベート空間を携帯することになり、ケータイ使用が私事化傾向を促進させていることを明らかにした⁽³⁾。情報化社会においてメディアの発展が、人々のくかかわり合いにどのような変容をもたらすのかこの問いをさらに深めるために、時代を遡って電話というメディアを使用することによるコミュニケーション行動の変容を考察することを本稿の課題とする。

1. パーソナル・メディア：電話とケータイ

(1) 電話に投げかけられたまなざし

高度情報化社会において、テクノロジーの発達により生み出されたケータイコミュニケーションは人々の行動に変容をもたらした。そこに投げかけたまなざしは、かつて素朴で原始的な電気メディア、電話が社会に登場したときに、人々が投げかけたまなざしと共通性があるようだ。

「一度、ケータイの呼び出し音が鳴り、ケータイで話し出したとたんに、そこにいる家族は見えない壁の外に、つまり情報の壁の外においやられてしまうのである。」

「ケータイを解して見えない世界とつながったとたんに、そこに存在する人は無視され、存在を認められないことになる。」

ということ述べたが⁽⁴⁾、実は導入された当初の電話にも同様のまなざしが、投げかけられていたのである。

「ベルが鳴り、そしてあなたは行ってしまふ。それが、つまり電話なのですね。」⁽⁴⁾初めて電話に接したときにフランスの画家ドガが言った言葉である。ドガのパトロンは新しい文明の利器、電話をドガに自慢しようと、彼を食事に招いた。パトロンはドガと食事をしている時間に電話をしてるように、友人とあらかじめ約束をしておいた。計画していたとおりにベルが鳴り、パトロンはドガの驚く顔を楽しみに電話に出た。ところが、ドガの反応はパトロンの意に反していた。それまで自分と楽しく食事を取っていた相手が、電話のベルに呼ばれて席を立ち受話器に向かって話し始めたことを見て、ドガは自分とパトロンとのくかかわり合いに水を指し、疎外感を与えるものとして電話を認識したのである。

フロイトも、電話を不快な文明の利器として捉えていたようである。電話の存在が、人と人とが離れて住んでもコミュニケーションを交わすことを可能にしたために、人々は離れて住むことが可能になった。離れて住むからこそ、電話は必需品となった。つまり、電話は、電話そのものの存在によって自分の必要性を生み出しているわけで、フロイトはこのトートロジカルな循環が不快だったという。⁽⁵⁾ケータイコミュニケーションがいつでもどこでもダイレクトに相手に繋がり、そこで人々は厳格な約束をしなくても待ち合わせをすることができるようになった。厳格な約束をしないことが習慣となり、ケータイは必需品となった。このケータイをめぐるトートロジーは、フロイトの感じたトートロジーとよく似ている。

ケータイコミュニケーション空間イコールプライベート空間という感覚が浸透することで、プライベート空間を携帯している感覚を生み出し、ケータイの使用が人々の行動の私事化を促進したと、先の稿で述べた。この基底に、プライベートコミュニケーションメディアとして、電話がすでにあったことを見落としてはならないと考える。

(2) メディアと情報化社会

情報化社会が人と人との<かかわり合い>にどのような変容を及ぼしているのかを検討し、教育的<かかわり合い>についての議論を掘り下げるために、「情報化社会」と「メディア」という2つの概念に立ち戻って考えてみたい。まずは、メディアについて定義を検討しよう。

先の稿では、メディアとは、「あちらとこちらを繋ぐ媒体でありコミュニケーションの仲立ちをするもの」と述べた。情報化社会への進展は、メディアの開発、発展に支えられており、メディアの発達には人間の本来もっているコミュニケーション欲求に関する欲望の追求の結果であると考えられる。メディアの発展がコミュニケーションに影響を及ぼすのは確かであるが、一方人間の欲望がメディアの発展を方向付けているのである。人間がどのようにコミュニケーションしたいか、どのように人と人とが<かかわり合い>たいのか、人間の本性が関係してくると考える。このような視座に立って、情報化社会の発展の歴史を、メディアの発展の歴史から捉えなおしてみたい。

あちらとこちらを繋ぐ媒体と定義したが、あちらとこちらはどのようなものか、他者と自己か。メディアの進展に伴いこの他者と自己の身体のあるように変容をもたらされ、それが<かかわり合い>に影響を及ぼしているのだと考える。身体感覚の変容が<かかわり合い>に変容をもたらしているという議論を進めるためには、マーシャル・マクルーハンがメディアとは、「私たちの身体の一部を拡張する技術である」⁽⁶⁾と言ったことに注目すべきである。電話は、耳や口を通常の身体では届かない遠くへと拡張するということなのである。メディアの発達に身体感覚に及ぼす影響を検討する上で有効な定義である。

自己、他者とは何か。他者体験についての議論

から<かかわり合い>の変容について考察するためには、メディアを「ある身体（または身体の集合）―「自己」と名付けよう―が選択した内容（何を選択したか）を他へと伝達する技術のことである」とする、大澤真幸の定義⁽⁷⁾が最も有効であると考えられる。

いずれの定義も、メディアの進化は人々の<かかわり合い>に変容をもたらすという本稿の視座を支えるものであり、マクルーハンが述べた、「メディアはメッセージである」という命題と通低するものである。私たちは、メッセージ（情報）はメディアによって伝えられると考え、メッセージとメディアは別物であると考えている。その際、メディアはメッセージ（情報）を伝えるための手段であり、どんなメッセージ（情報）が伝えられるかが関心の的となる。しかし、同じメッセージでも、どんなメディアにより伝達されるかにより人々の身体に固有に作用する。このような意味で、マクルーハンは、メディアそのものにメッセージ性があるといったのである。メディアの開発、発展が、人々の<かかわり合い>に作用し、社会にもたらす影響を考えると重要な視座であり、高度情報化社会に生きる私たちへの警鐘も含まれていると考える。

(3) メディアの発展と高度情報化社会

現代社会では、人々は電気・電子メディアを活用しコミュニケーションを図っている。メディアの発展を歴史的に区分すると、以下の4つの段階となる。⁽⁸⁾

第1段階

メディアは「音声」、「図像」

この段階では、「コミュニケーションは志向する身体との相互的な現前を要求する」のであり、直接的、対面的である。

第2段階

メディアは「文字」

手紙を例に考えることができる。コミュニケーションは、遠隔化される。つまり、離れた地点にいる身体、現前しない身体とのコミュニケーションを「文字」は媒介する。

第3段階

メディアは「印刷された文字＝活字」

中心的な単一の身体から、情報を周辺にいる多数の現前しない身体たちに向けて散布することを可能にした。「新聞」、「書籍」、「雑誌」などがこれに当たる。

第 4 段階メディアは「電気・電子メディア」

伝達時間は、限りなく 0 に近くなり、現前しない他者と、ほとんど瞬間的にコミュニケーションができる。情報の伝達空間は拡散的で、自覚的に目標とされている相手の範囲を大幅に超える。盗聴、盗視をされ、付加的な技術や新たなモラル、マナーが要請されることになる。

メディアの発展の歴史から 4 つの区分をしてみたが、電話は声というメディアを電信技術によって送信するための方法としてケータイの前段階にあり、第 4 段階の前半に位置する。

インターネット接続が可能になりマルチメディア化した「携帯」電話、ケータイが浸透した現代は、第 4 段階の後期に当たり、高度情報化社会と呼ぶに相応しい段階である。高度情報化社会の前段階にある、電話の発明、発達の歴史を探ってみよう。電話の発達により、コミュニケーション行動にどのような変容が及んだのか。また、固定電話から、携帯電話へ、そしてケータイへと発展した背後に、人間のどのような欲望があったのかを見ていくことにする。

2. 電話の発明と発展

(1) パーソナル・メディアへの道

電話の誕生、発展の歴史を見ていくことにしよう。

先号では、携帯をキーワードに移動体電話の歴史から考えたが、今号では、電話をキーワードにコミュニケーション行動の変容を考えることにする。

コミュニケーション研究や、メディア研究において、電話は長い間研究の対象の外に置かれてきた。ラジオやテレビなどのマス・メディアに関しては、多くの研究の蓄積があるにもかかわらず、パーソナル・メディアであるためか、電話もケータイ同様、研究の必要性が認識されてこなかった。実は、電話の発明の基礎は、「声という身体」を空間を越えて複製する技術であり、ラジオやテレビの発達へと発展していく元でもあった。電話は、

誕生当初からパーソナル・メディアとして考案されたわけではなかったのだ。

電話の歴史は、1876 年にアレクサンダー・グラハム・ベルが、ワシントンの合衆国特許庁から特許を取得したことから始まる。特許申請の書類には、「音声その他の音を、電信技術によって送信するための方法および機器」⁽⁹⁾と記されており、必ずしも人の声を 1 対 1 で伝え合うための道具としてのみ構想されたものではなかった。

3 代続いた音声生理学者の家系にあったベルは、音声学、言語障害を治療する研究に携わっていた。耳が聞こえなくても正確な発音練習ができるようにするための手法「視話法」などを扱っていたため、音を複製する装置の研究に取り組み、ドイツのヘルマン・フォン・ヘルムホルツの影響を受け、音を複製する電氣的装置を発明した。

当時 19 世紀後半欧米諸国において、複数の発明家や、科学者たちが同じ様な研究を同時にしていた。1835 年サミュエル・モールスは、電信を実用化していた。テレ・コミュニケーションは電話以前にすでにあつたことになる。

テレ・コミュニケーションとしての電信が誕生するまでは、情報の流通には人や文字を運ぶ乗り物、つまり情報を乗せる乗り物がメディアとして必要であった。飛脚、馬車、船、鉄道などがこれに当たる。鉄道は、19 世紀から 20 世紀にかけて世界を急速に覆い、社会のあり方を変えたメディアである。また鉄道があつたおかげで、アメリカにおいては電話のインフラストラクチャーは急速に進んだ。テレ・コミュニケーションは、トランスポートーション（輸送）から独立した概念となった。

電信は、モールス信号が伝えられるのであり、身体から切り離された声だけが届くというのは電話が始めてである。ベルは特許をとつたこの電話を用いて企業を起し、アメリカの電信電話会社をつくるのだが、それに先立って資金を集めるためにデモンストレーションをあちらこちらで行った。演奏会の様子や、ニュースを遠隔地の人に伝えるデモの方法をみると、ベル自身が、1 対 1 のパーソナルメディアを構想していたのではないことが伺える。

(2) 交換機の発明

電信が開発される前、情報伝達速度は、情報を運ぶものの速度、具体的には、人間、馬車、蒸気機関船などの移動速度以上に速くなることはありえなかった。ところが、電信は、時間と空間を消失した。

19世紀に登場した鉄道が、ダイヤを組み複雑なシステムを成り立たせるためには、電信なくしては考えられない。近代の新聞も電信の存在なしにはありえなかった。電信は、「ユニバーサル・コミュニケーション」「リアルタイム・コミュニケーション」として発展した。

信号を伝達する電信の後、電話は人の声を伝達するという点で人々の注目を集めた。電話がリアルタイムコミュニケーションとして、その精度を高めるには、交換技術の発達が不可欠であった。現代社会ではその状況を思い浮かべることすら困難だが、交換機がないということは、網状ネットワークによって特定の地域の特定の相手とつながっているだけなのである。電話は、すでに見知っている相手との会話の道具であり、直接対面コミュニケーションの代替行為としての意味しかなかった。

次の段階として、手動交換機システムが導入された。まず、交換手と呼び出して、相手の住所と名前を伝える。すると、交換手が電話線をつなぐという手順で、交換手を介して電話がつながるのである。電話コミュニケーションは、住所と名前を知っている既知の人物との、直接対面の代替として成立した。

このあとの段階として、自動交換機の発明により電話は精度を高めるのである。自動交換機開発には、興味深い話がある。1891年に自動交換機の特許を取ったのは、カンザスシティの葬儀屋であった。この地域には2軒の葬儀屋があったが、交換手がもう一軒の葬儀屋の夫人で、電話による仕事の依頼がそちらの葬儀屋につながってしまい商売に差しさわりがあると信じ込んだ他の葬儀屋の主人が、一念発起して自動電話交換システムの開発をしたのだといわれている。

その後電話は、電信やそれ以前のメディアにはない新しい特性、機能性を社会に認められ、自明のものとなっていく。自動交換システムの発展の

結果、個別的、私的に肉声を電氣的に再生するための装置として、他のメディアと一線を画することになる。人々の、世の中のあらゆる人とパーソナルに声を交わし触れ合いたいという欲望を駆り立て、満たし、発展していくことになる。

吉見らの研究の成果によると、現代の高度情報化社会のヴァーチャルリアリティに発展した、身体感覚の電子化・複製化の原点に、19世紀に誕生した写真、蓄音機と並んで電話の存在があり、これら2つの聴覚メディアと、視覚メディアがラジオ、テレビなどのマス・メディアや、テープレコーダーなどのパーソナルメディアに分かれて、発展したことを明らかにしている。⁹⁾

以上見てきたように、電話の発展の歴史には、経済発展の影響や、人々のコミュニケーションに対する欲望などが作用し、必ずしもテクノロジーのみが発展を支えたのではないことは興味深い。

(3) 日本における電話の普及

電話は、日本で独自に開発されたのではなく、電信、鉄道、郵便、ラジオ無線と一緒に、同時に西欧諸国から移入され、国家の政策として計画され、実用化された。電話機は、グラハム・ベルの特許出願の翌年1877年には、日本に入ってきているにもかかわらず、郵便や、電信に比べて、電話の導入は遅れた。当時、日本は内外に対する強力な中央集権体制の確立を誇示するために、電信事業に資本を投資した。その後だけに、電信事業以上の資金がかかる電話は、民営とすべきか官営とすべきかの議論の末、1889年(明治22年)に官営化することとなった。加入者が少ないため、電話使用料金が高く、なかなか発展しなかった。家庭の日常生活の中に電話が登場し始めるのは、第2次世界大戦後になってのことである。1960年代の半ば以降に普及が進み(図1参照)不可欠のメディアとなり、用件伝達のためのものとして自明視されるようになった。

3. 電話利用の変遷

(1) メディアとしての電話

メディアの変容や発達の要因としてテクノロジーが存在することは確かであるが、その時代ごとの社会の要請や、人間のコミュニケーションに関する

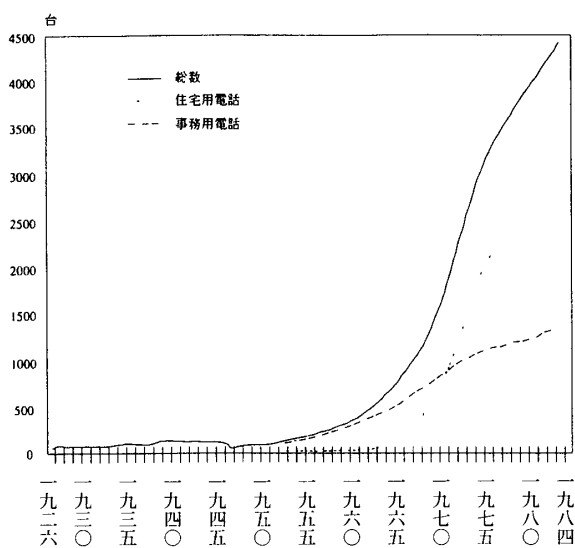


図1 電話加入数の推移 [1926～1984年度] (単位: 1000台)
 (「完結 昭和国勢総覧第一巻」東洋経済新聞社、1991より作成)
 (出典: 吉見俊哉他、『メディアとしての電話』、p.63)

る欲望が、テクノロジーの発展を促したことも確かであると考えられる。では、電話というメディアの登場によって人々の行動に何がもたらされたのか、順を追って検討していくこととする。

電話がラジオのようなマス・メディアではなく、人々を1対1で結びつけるパーソナル・メディアとして受容されてきたことは、電話という技術がもっていた多様な可能性からの1つの選択であったにすぎないことは、先に述べたようにベルの特許申請の書類や、ベルの電話普及のためのデモンストレーションの方法に見て取ることができる。

なぜ、電話がパーソナルメディアとして発達し、現代のケータイにまで発展したのかを研究してみると、私事化傾向の促進などに見られるケータイのもたらしたコミュニケーション変容は突然現れたのではなく、電話コミュニケーションにより準備され、進んでいたことが感じられるのである。

マクルーハンの「メディアは、メッセージである」という命題に戻れば、電話は私たちに「遠隔地に位置する2人の人間の間に音声的なコミュニケーションを可能にする」⁽¹⁰⁾というメッセージをもたらした。電話の登場により、空間的な感覚に変容が起こったことは確かである。距離感覚の変容や、対面的なリアリティとは別の電話空間⁽¹¹⁾としてのリアリティ感覚などの知覚である。

(2) 電話空間

電話は、人々が対面的に出会うのとは異なるくかかわり合いの空間を生み出した。私たちは、電話を手に入れたその時から、電話のベルが鳴れば、どんな相手からかかって来ようとも、まずは、受話器を取り電話に出なくてはならない状況におかれた。⁽¹²⁾一般には、電話は、相手が誰であることを確認し、同時に自分が誰であることを名のことからコミュニケーションが開始される。したがって、電話が通じた瞬間、受話器の向うの相手は、常に見知らぬ「他人」として現れるのである。この電話の特性を有効に生かしたコミュニケーションに、電話相談、電話カウンセリングがある。相談者が、名のことなしに匿名のまま、社会的体面を気にすることなく自己表出ができ、また、自分に好都合のように治療者のイメージを作り上げることで有効活用されている。

電話によるくかかわり合いは、対面的なくかかわり合いとは異なる空間を生み出すのだ。この空間を対面的な空間と区別して、若林は「電話空間」と呼んだ。⁽¹¹⁾

(3) 用件電話からおしゃべり電話へ

まず、電話は人に会うための約束を取り付ける道具として活用された。したがって、電話が導入されたために、突然予告なく訪問することが失礼になったのである。また、電話の普及率が低かった時代には、電話は、公衆電話や、呼び出してもらって使用するのであるから緊急時の特別な手段としてのみ用いられていた。この時代電話は用件を手短かに伝え、対面コミュニケーションのための約束に用いられていた。

ところが、電話の普及が広がり、人々にとって日常的なものとなるにつれて、通話時間が延び始めた。会うための約束や、用件を伝えるのではなく、電話でおしゃべりを楽しむようになっていった。しかし、長電話は、連絡や用件のための電話を妨害し、迷惑であるという良識が当時は生きていた。

おしゃべり電話は、用件電話以上に人々を魅了していった。人と用件もなくしゃべること、これは人間の欲望である。その証拠に、現代のケータイへと進化したではないか。ケータイへの進化は、

電話のおかれた場所の変化、電話の偏在化の道筋としてみると興味深い。吉見たちの研究によれば、電話が各家庭に導入された当初は、玄関の靴入れの上など、出入り口の近くに据え置かれた。これは、電話は外部との接点として人々が認識していたことの現れであるという。家の外と繋がるものとして考えられていたのだ。ところが、電話は次第にリビングに置かれたり、コードが伸ばされてリビングに持ち込めるようになっていったということである。そして、親子電話が開発され、寝室、子供部屋などの個室へと場所を移していった。すなわち、次第におしゃべり電話がしやすいように、そういった欲求を充足することができるように、電話の技術は開発されていった。そして、ついに持ち歩くことができる携帯可能な電話へと進化していったのである。

4. <かかわり合い>の変容

(1) 現前の他者の阻害

今日、高度情報化社会に生きる私たちにとって、電話は日常生活の中で、自明なものとして存在している。いや、ケータイが普及した現在では、固定電話は意識に上りにくいものにすらなっている。学生100名にアンケートをとって見たところ、家庭の固定電話や公衆電話は95%の学生がここ1ヶ月以内に1度も使用したことがないと答えた。使用したことがあると答えた学生は、ケータイが故障したため、あるいはケータイを忘れたために使用せざるを得なかったことを述べている。いまや、若者にとって固定電話はケータイの代替的な役割を果たすに過ぎない存在である。

そこで改めて、歴史的な視点から電話というメディアについて検討してみた。電話、テレ・フォンは文字通り、遠く離れた人と人との間で音声を送受信する装置として開発され、双方向通信のパーソナル・メディアとして発展した。今日、私たちが自明視していることについて、開発、導入当初の電話を見て先達が言ったことばは、私たちの行動変容に気付かせてくれるものである。ドガが、言ったことば、電話を手に入れたその時から、電話の向こうの相手が誰であれ、とりあえず受け入れなくてはならない立場におかれること、その結果、現前の身体を阻害するものとなることを指摘

している。

電話が、各家庭の中に普及した当時、まだ電話が各家庭に1台しかなかった時代、若者が電話で長話をする姿は、両親との間に摩擦を生んだ。電話料金がかさむという経済的な理由や、他からの電話が繋がらないという理由からの摩擦であると考えられる。いや、電話をしていない家族にとって、家族成員の一人が外部と接続してしまったことで、本来成立しているべき家族の共同性が不安にさらされているということこそが摩擦の原因だろう。

ケータイの浸透した現代では、同じ家の中に在ってもそれぞれが回線を通して外に繋がっているため、家族の共同性が電話空間により侵食を受けることに慣れてきてしまっている。レストランで子どもづれの男女がテーブルを囲んでいても、それぞれがケータイメールをしたり、子どもはゲームをしたりで、対面的空間は物理的に存在するだけで、そこに家族の団欒は見られない。この状況は、固定電話が家庭の空間のどのような場所に置かれてきたかという、電話普及と遍在化の歴史の検討を通して、ケータイ以前に電話が準備したものであることが明らかになった。

(2) 場所の共存に依存しない近隣

遠く離れた人と繋がることが可能になったおかげで、人々はますます遠くに離れて住むようになり、遠くにいるために電話が必需品となっていった。人々は、現前の他者よりも電話回線の中の他者と繋がっている。電話利用により人々の<かかわり合い>には、物理的な環境の近接性よりも、心理的近接性が優位となった。同じ住居空間の中にいる家族が、電話の遍在化によりそれぞれ家庭の外に流れ出した。一方では、仕事や、勉学のため単身で暮らし、家族と離れている人々を回線を使って結び付けているのも電話である。

電話の登場により、空間的な近接性に、人々の<かかわり合い>の親密さは依存しなくなった。むしろ、近くに存在する人同士を結びつける必要がなくなってしまった。家族や、近隣地域社会の結びつきが希薄になったのは、電話が人々に離れて暮らすことを可能にしたことに関係がないとはいえないだろう。

〈かかわり合い〉は回線の中が、優位になったということである。こうした〈かかわり合い〉の基底には、人々の帰属意識の変容が隠れている。つまり、家族でも地域でも、国家でもなく、回線の中によりどころを求めているといえる。家族の機能の低下や、地域社会の〈かかわり合い〉の希薄化は、電話というメディア浸透と無関係だとはいえまい。

(3) 電話と身体

もう一度、メディアに関するマクルーハンの定義に戻ろう。彼は、メディアは、「私たちの身体の一部を拡張する技術である」といったが、電話は、「声」という身体の一部を空間を越えて複製するメディアである。したがって、電話では、声以外の身体は伝えられない。当たり前のことではあるが、この点が、対面的コミュニケーションとは質的に異なる〈かかわり合い〉を生み出すのである。

アンケートでの学生の回答の中に、電話だから話せることもあるという記述があった。同じ相手と話をする場合でも、直接会った時と、電話で話しをする時とでは、お互いの中に感じられる雰囲気が違うというのだ。確かに用件もないのに長電話をした時に、会話の世界に埋没してしまっている自分を感じたことがある人は少なくないだろう。

電話コミュニケーションと対面コミュニケーションの違いを整理してみよう。電話によるコミュニケーションは、声のみを唯一の記号とする。通常のコミュニケーションに含まれる、顔や身体表情、意識的、無意識的な身振りなどの他の記号的な要素がないことになる。他者のまなざしを欠いているのだ。したがって、電話コミュニケーション空間では、表情により傷つけあうことはない。この点が、電話なら何でも話せるということになるのだろう。電話は、身体的なイメージを伴うが、相手に自分の顔や姿をさらすことはない。お互いに、相手を想像で思い描くのである。

この特性を活用したものが、電話相談である。匿名の関係であるから、回線で語られること意外は、想像で補完する以外にない。顔見知りとの電話、つまり対面コミュニケーションと平行してなされる電話コミュニケーションにおいても、まな

ざしが欠けている分を、メッセージの受けては補完して受け取ることになるというわけである。

まなざしを欠いたコミュニケーションについての議論を先に進めるために、大澤真幸のメディアの定義を採用しよう。「ある身体（または身体の集合）—「自己」と名付けよう—が選択した内容（何を選択したか）を他へと伝達する技術のことである。」

お互いに、電話に向かって話している相手、他者は、非電話空間で対面する時の他者と同一だろうか。声という身体だけの他者は、生身の他者と同一であるのか。この問いを解くために、大澤は分析哲学上の思考実験をしている。⁽¹⁴⁾フロイトの『快感原則の彼岸』⁽¹⁵⁾に収められた「fort-da 遊び」を援用し、他者を孕む身体（私が私自身に対して他者であるということ、私が私自身の内に他者を孕んでいるというパラドクス）の説明をした上で次のように結論付けている。「電子メディアは、自己が自己に対して他者でありうることの潜在的な可能性を現実化する、触媒のような働きをする。」⁽¹⁶⁾電話というメディアは、時間的には、伝達速度が極限的に上昇し、空間的には、伝達される情報が極度に拡散するという特性を持っている。そのために、「電話を介することで他者が、現前しない現前として、つまり遠隔にある近接性として、意味づけられてしまう。」⁽¹⁷⁾電話の相手は、実際の相手とは異なる、固有の他者として現象するのだといっている。電話に接続された身体は、かける自己の身体の側に現出する、内的な他者性と対応していることになるのである。私たちは電話を介して遠隔地にいる他者に話しているつもりであるが、電話口に向けて話しかけている、つまり電話というメディア自身に話しかけていることになるのである。自他関係の混乱が起きているというのだ。

おわりに

情報化社会といわれる今日、メディアの発展が人々の〈かかわり合い〉にどのように変容を及ぼすかを、電話というメディアの活用から考察した。

音声の電氣的複製装置として発明され、パーソナル・メディアとして発展した電話は、人々が、声という身体により非対面空間で繋がっていたい

という欲望をもっていることをあらわしている。

電話コミュニケーションの特性は、電話というメディアが、現実の他者とは独立した他者としてたち現れることで、人々の自他感覚に作用し、電話コミュニケーションを魅惑的なものになっている。そして、現実の他者との〈かかわり合い〉を希薄なものにしてしまう危険性をも孕んでいることが明らかになった。

NTTの調査によれば、大学生の1週間あたりの通話回数、通話時間は他の世代よりも高い値を示しており、大学生の通話行動は多いことがわかる。⁽¹⁸⁾

電話コミュニケーションを志向する学生たちの〈かかわり合い〉の変容を理解し、保育者養成と幼児教育という観点から、考慮すべき点を考察しておきたい。

幼児期という段階は言語が未発達で、身体表現により他者とのコミュニケーションをしている。シャルロッテ・ビューラーが「転嫁現象 (transitivisme)」や、ラカンが「captation (他者の像による真の捕われ)」という概念で説明しているように、自己と他者との錯認が頻繁に起こりうる段階でもある。学生たちのまなざしを欠いた非対面コミュニケーションを好む傾向は、対面空間で現実の他者として現れる子どもとかかわる能力を衰退させる可能性がある。対面的に成立しているはずの状況の定義をひどく不安定にする様な学生の〈かかわり合い〉の態度を目にするたびに、幼児期の子どもの特性に対応できるような大人としての発達が十分営まれていないことも危惧されるのである。さらに、電話コミュニケーションを好む若者の行動の背後に、自己と他者の反転を志向する欲望があるとすれば、幼児期の発達段階の特性をそのまま持ち越しているようにも思えるのだが、思い過ごしであろうか。

ケータイも含めた電話コミュニケーションは、声のみを唯一の記号とし、顔や身体表情、意識的、無意識的な身振りなどの他の記号的な要素がないことから、対面コミュニケーションよりはるかに想像力で他者を理解することになる。では、ここで想像力が鍛えられるかということ、実は、想像力で埋め合わせている他者は、実は自分の身体の中にある他者なのであるから、現実の他者では

ない。フロイトの「fort-da 遊び」、ラカンのL図などから説明される他者と主体の関係についての理論を⁽¹⁹⁾考察すれば、私自身の中に他者を孕んでいることも明らかであり、電話というメディアを通してたち現れる他者は、私自身のうちに孕まれた他者の出現なのである。現実の、私の外にある他者を理解する為には、幼児期からの身体を介した〈かかわり合い〉が重要となる。

高度情報化時代において、電気・電子メディアの発達普及により、現実の他者と直接触れ合うことが免除されている今日、幼児期だけではなくその後の発達段階でも、自他の反転はメディアによって起きているのである。このことに配慮した、教育が求められる。前回考察したように、「想像力を鍛えること」、ここに問題を解く鍵は在ると考える。具体的な方策については、今後の課題としたい。

【註】

1. 情報化社会とは、新しい情報技術や機械が大量にまた大規模に導入された社会であり、導入によりその社会の構成員の行為や、経験が変容することが知覚されたり、予測される社会のことである。情報化社会といわれて久しいが、パーソナル・コンピュータが導入され、大量の情報、高速に伝送される現代社会を高度情報化社会と呼ぶ。
2. 携帯電話の中でも、1999年に始まったiモードサービス後の、インターネット接続が可能になり、マルチメディア化した携帯電話を「ケータイ」と呼ぶ。鬘櫛久美子、『情報化社会と教育—ケータイを介したコミュニケーション行動に見る〈かかわり合い〉の変容—』(名古屋柳城短期大学紀要第24号、2002年度、pp. 89-100。)では、携帯電話を身につけて持ち運ぶことができる電話という意味で総称し、「ケイタイ」と記述した。
3. 鬘櫛久美子、『情報化社会と教育—ケータイを介したコミュニケーション行動に見る〈かかわり合い〉の変容—』、名古屋柳城短期大学紀要第24号、2002年度、pp. 89-100。
4. Jünger, Ernst. *Das Sanduhrbuch*, 1945. (今村孝訳、『砂時計の書』、講談社学術文庫、

- 1990 年、17 頁。)
5. Derrida, J. *La Carte Postale, Flammarion, Librairie FLAMMARION: Paris, 1980.* (丹生谷貴志訳、「『葉書』より」(抜粋)、『Inter-Communication』0 号。
 6. McLuhan, Marshall. *Understanding Media: The Extension of Man, Mc Graw-Hill, 1964* (栗原裕・河本仲聖訳、『メディア論—人間拡張の諸相』、みすず書房、1987 年、7 頁)
 7. 大澤真幸、『電子メディア論—身体メディアの変容—』、新曜社、1995 年、30 頁。
 8. 同上書 31-33 頁。大澤は、マクルーハンや、オングラの考えにしたがい、3 つの歴史的発展段階に区分した。これを参考に、活字メディアの段階を独立させ 4 段階とした。
 9. 吉見俊哉・若林幹夫・水越伸、『メディアとしての電話』、弘文堂、1992 年、195 頁。第 5 章にて水越は電話に関して、歴史的な視点からの研究をまとめる中で、ベルの取得した特許について資料を基に言及している。
 10. 同上書、33 頁。
 11. 同上書、40 頁。
 12. ナンバーディスプレイが電話器についたことにより、この状況は改善されたかに思える。実は、改善されたどころか新たな気遣いが必要となった。見知らぬ人からの電話ならかまわないが、知人からの電話の場合、電話に選択的に出ないと思われるとくかかわり合い>にひずみが生じてしまうので、出ないわけにはいかないのである。
 13. 吉見俊哉他、『メディアとしての電話』、70 頁。若林は、第 2 章において大学生からアンケートをとり分析している。
 14. 大澤真幸、『電子メディア論—身体メディアの変容—』、23-44 頁。
 15. Freud, S. *Jenseits des Lustprinzips*, Internationaler Psychoanalytischer Verlag, 1920.
 16. 大澤真幸、『電子メディア論—身体メディアの変容—』、43 頁。
 17. 同上書、78 頁。
 18. 吉見俊哉他、『メディアとしての電話』、152-

153 頁。発信通話回数、発信通話時間ともに高い値を示しているのは、大学生、ことに女性の大学生であることがわかる。

19. ラカンの理論についての詳細は、以下の論文を参照されたい。鬢櫛久美子、『『教育的関係』再考Ⅱ—J.ラカンの理論を中心に—』、

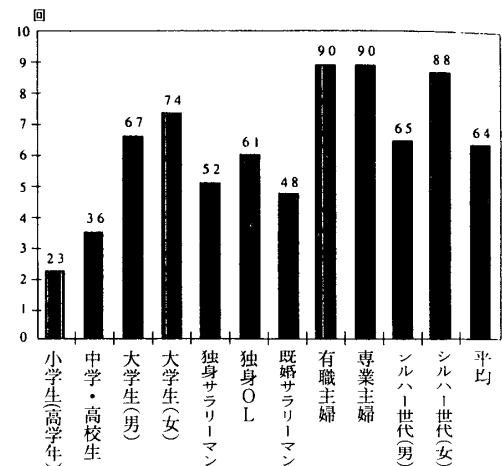


図 2 ライフステージのなかの発信通話回数 (一週間当り)
(注:「シルバー世代」は、60 歳以上の男女を指している)
(「図説 日本人のテレコム生活 1991」NTT 出版、1991 より作成)

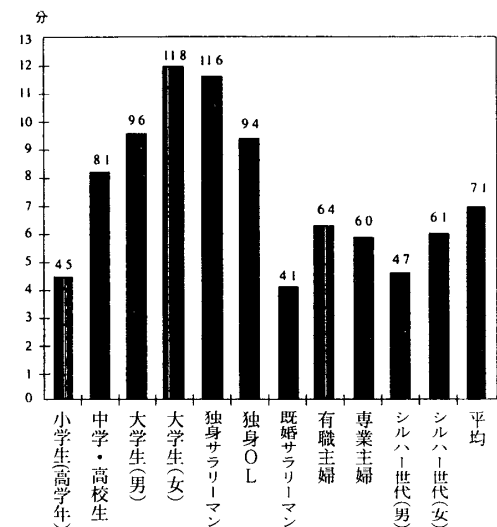


図 3 ライフステージのなかの発信通話時間 (一回当り)
(「図説 日本人のテレコム生活 1991」NTT 出版、1991 より作成)

名古屋柳城短期大学紀要第 23 号、2001 年度、pp. 73-84。

Education in an Information-Oriented Society
— Changes of Consciousness Depending on Communication
by the Use of Telephone —

Bingushi, Kumiko*

This paper surveyed the development and spread of telephone as personal media, examined a specific characteristic of communication using telephone and its influence on the user's communication.

When Alexander Graham Bell invented telephone 1876, he didn't consider the telephone only as a toll to communicate with person to person. But the telephone developed as a personal communication toll, today the personal media evolved from telephone to cellular phone. It is suggested that we desire to communicate person to person through phones, not directly.

This paper clears three points.

1. Using telephone decreases education ability in home and community, because it makes possible to communicate with person living far away each other.
2. Using telephone, similarly cellular phone, breaks relationship with present person.
3. Using telephone, person involves with the specific other that is not the other in his or her presence, but in himself or herself.

This paper proposed that we should educate children and students in their presence, by means of body.

キーワード：電話 (telephone), メディア (media), コミュニケーション (communication),
<かかわり合い> (involvement)